

一振りに込める、牛への思いと畜産を支える誇り――

こまつまこと 小松 真人 さん (28 歳)

大学在学中に2級認定牛削蹄師の資格を取得。卒業後、仕事をきっかけに小林市へ移住し、23歳で削蹄師の道へ。現在は、西諸の畜産を足元から支える一人として活躍している。

一本の鎌で、牛の「第二の心臓」とも呼ばれる蹄を整える削蹄師。その技術で牛の健康を守り、畜産農家を陰から支える人がいる。それは、宮崎県牛削蹄競技大会で見事優勝を果たした小松真人さんだ。

神奈川県出身の小松さんは、前職をきっかけに小林市へ。畜産に関わる仕事がしたいという思いから、大学時代に興味を持った削蹄師の道を選んだ。

「農家でなくても牛と関わることができる。牛との駆け引きが面白い」。

しかし、縁もゆかりもない土地での挑戦は、決して平坦な道ではなかった。初めは西諸弁が分からず、知り合いもない。仕事の依頼がない日々が続いた。

それでも、先輩削蹄師の現場に同行し、技術を磨き続けた。教えを受けながら、一つ一つの作業を丁寧に積み重ねる。その姿勢が畜産農家の信頼を生み、今では仕事の依頼も増えている。

「牛一頭一頭、蹄の切り方も接し方も違う。だからこそ、作業前に牛とコミュニケーションを取る大切」と小松さんは話す。

多い日には、一日で20頭もの牛を手がける。大きな牛を相手にするため、常に危険と隣り合わせだ。これまで、鎌で手を切ったり、牛に蹴られたりしたこともあるという。だからこそ、小松さんは丁寧で正確な作業を心がけている。

「人の焦りは牛にも伝わり、自分だけでなく、牛のけがにもつながる」。

牛の呼吸を感じ取り、その心に寄り添いながら鎌を振るう。その一振り一振りに、牛への思いと西諸の畜産を支える誇りを込めて。小松さんの挑戦はこれからも続いていく。

7月に開催された宮崎県牛削蹄競技大会で優勝し、九州大会出場への切符を勝ち取った。「次は九州大会で優勝し、全国大会出場を目指す」と意気込む

削蹄では、蹄の裏を削った後、内側をやや深めに削り、人の土踏まずのようなくぼみをつくる。仕上げてやすりをかけ、蹄全体の形を丁寧に整える

小林市
こばやしびと
Vol.137

